

資料

琴秉洞編・解説  
全5巻

雑誌にみる

近代日本の

朝鮮認識

—— 韓国併合期前後 ——

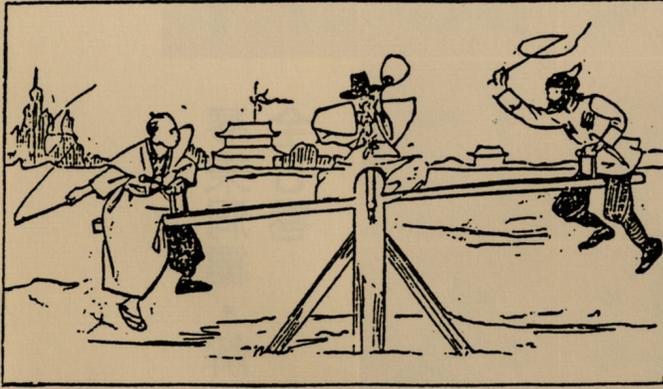
明治後期の主要雑誌を含む三〇誌より「朝鮮」を主題とする記事を集成し、近代日本人の朝鮮観・朝鮮認識を検証する。

緑蔭書房

# 編纂にあたって

朝鮮および朝鮮人に対する日本人の偏見と民族的蔑視観は、観念的には記・紀に発するが、具体的な深化過程をたどるのは秀吉軍の侵略を経て明治に至り、自己の近代的先進性への自信と朝鮮を侵略対象と定めた以後のことであろう。わけても、日清、日露戦に勝って、坂の上の雲を目掛けて駆け登った時、その足もとには蹂躪された朝鮮とその民族があった。日本による朝鮮の植民地化過程とその完成は、偏見と蔑視観を深め、定着させた時期でもある。今日もなお根深く残る朝鮮人に対する偏見の根源を本資料集は客観的に明らかにしようとするものである。

# 本書の特色



『アなだ己はのるれら扱もてつ上がヲチド』くは日鮮朝

# 本書の構成と収録した史料 (抜粋)

## 第1巻

保護条約締結以前期(明治34・12～明治38・12)

162件

- 朝鮮の幼年世界「少年世界」
- 朝鮮の農業開発は我帝国の責任なり「実業之日本」
- 朝鮮の殖民的資格「太陽」
- 戦後経営の一斑「太陽」
- 韓国渡航を慫慂す／満韓経営所見「東洋経済新報」
- 日本帝国の膨張「太陽」
- 韓国の教育に就りて「太陽」
- 朝鮮に対する日本人の職分「新人」
- 朝鮮同化論「新人」
- 断じて韓国を属邦とすべし「日本人」
- 韓国下等之民情「朝鮮之美業」
- 朝鮮の復活期「新紀元」

## 第2巻

統監政治期 上(明治39・1～明治41・12)

124件

- 韓国の処分「中央公論」
- 対韓意見「太陽」
- 暴徒及其鎮圧「朝鮮」
- 如何に韓人を教育すべきか「朝鮮」
- 韓人は教ゆべきか教ゆべからざる乎「朝鮮」
- 名士の韓人観「朝鮮」
- 名士の朝鮮観「朝鮮」

## 第3巻

統監政治期 下(明治42・1～明治43・7)

120件

- 韓国民に告ぐ「朝鮮」
- 統監政治の失敗「太陽」
- 統監政策の一斑「中央公論」
- 統監政治の根本義「中央公論」
- 曾榘統監論「中央公論」
- 臆伊藤公「朝鮮」

三宅雪嶺ほか

伊藤博文  
浅田江村  
西陵隠士

市井散人  
曾榘副統監ほか  
前間恭作  
佐藤進ほか

戸水寛人  
大隈重信

木村睡虎  
酒匂常明  
矢津昌永  
大井憲太郎  
大隈重信  
新渡戸稲造  
金沢庄三郎  
島田三郎  
小山東助  
松井広吉  
三枝生

▼本資料集は、保護条約締結以前期（一九〇一）から併合初期（一九一四）までの期間の主要雑誌を含む三〇誌のうち、朝鮮を主題とする記事から六七八件を精選し、当時の朝鮮観が概観できるようにしたものである。

▼収録にあたっては、韓国併合期前後を四期全五巻（①保護条約締結以前期 ②統監政治期上・下 ③併合条約締結期 ④併合初期）にわけ、朝鮮観の変遷と各期の特徴がわかるようにした。

▼各期ごとに解説・分野別著者名索引等を付し、利用者の便宜をはかった。

▼分野別著者名索引により、軍人、政・官界、経済界、言論界、宗教界、教育界等の朝鮮観が検証できる。

▼伊藤博文、大隅重信等明治期の国家指導者の朝鮮観研究にも必読の資料。

▼本資料集は、『資料 新聞社説に見る朝鮮・征韓論〜日清戦争』（小社刊）との併用により、日本人の朝鮮認識の通史的・体系的解明が、いっそう深化するものと確信する。

### 収録雑誌（順不同）

太陽 中央公論 東京経済雑誌 東洋経済新報 実業之日本 朝鮮之実業 朝鮮（改題朝鮮及滿洲） 滿韓之実業 朝鮮公論 日本人（改題日本及日本人） 実業の東亜 経済 富 少年世界 独立評論 活動の日本 六合雑誌 新人 聖書之研究 上毛教界月報 日韓実業界 新紀元 富強之民 経済時報 写真画報 実業界 実業の世界 実業之友新東洋 新公論 新時代

伊藤公の横死と韓国警察「日本及日本人」  
名士の伊藤公観「太陽」

韓国果たして日本に同化し得べき乎「東洋経済新報」

対韓策を奈何せん「中央公論」

日韓合邦論に就て「経済時報」

朝鮮合邦賛成論「太陽」

日韓合邦論に就て「朝鮮」

韓国人は果して度し難き国民か「実業之日本」

### 第4巻

#### 併合条約締結期（明治43・8〜明治43・12）

129件

黒潮浪客  
島村抱月ほか  
中村啓次郎  
尾崎行雄ほか  
林董  
山県五十雄

日韓合併と経済「滿韓之実業」

朝鮮人には如斯して日本魂を吹込むべし「実業之日本」

併合と名士の意見「日本及日本人」

朝鮮は弟日本は兄「経済」

朝鮮人とは如何なるものか「朝鮮」

名士と朝鮮観「朝鮮」

朝鮮の併合と少年の覚悟「少年世界」

日本民族と基督教「新人」

韓国併合の効果如何「太陽」

朝鮮の開発に對して国民は如斯き心懸けあるを要す「実業之友新東洋」

洪沢栄一

### 第5巻

#### 併合初期（明治44・1〜大正3・9）

143件

朝鮮を如何に教育すべきか「朝鮮」

日本帝国憲法は朝鮮に行はる、や「東京経済雑誌」

警察より見たる朝鮮人「朝鮮」

朝鮮人は日本文明と同化の能力あり「朝鮮」

總督政治に對し朝鮮人は何の不平あるか「朝鮮及滿洲」

滿鮮は我国にとりて最も重要な殖民地なり「朝鮮及滿洲」

朝鮮統治の経過及施政の方針「朝鮮公論」

朝鮮統治の批判「朝鮮公論」

殖民地教育と国民性養成問題「朝鮮公論」

経済的に觀たる朝鮮婦人の労働「朝鮮公論」

植民帝国としての日本「朝鮮公論」

付録 朝鮮總督報告韓国併合始末

大隈重信ほか  
美濃部達吉  
今村鞆  
林泰輔  
釋尾旭邦  
永井柳太郎  
寺内正毅  
鶴原定吉ほか  
波岡茂輝  
小宮三保松  
牧山耕蔵





其位高公の  
かゝる姿も惚めた  
山名宗師うし流ゆい

# 民族的偏見をただす基礎資料集

松尾尊兌

(まつお たかよし)

今日もお続く日本人の朝鮮人に対する民族的偏見の由来は古い。この重大問題についての歴史的研究は皆無とはいえないまでも、日本近代史の他分野にくらべて、質量ともに劣るといわざるを得ない。この方面における代表作ともいふべき故姜東鎮博士の労作『日本言論界と朝鮮』

(法政大学出版局、一九八四年)にしても、時期的には併合以後の一九一〇年から一九四五年までに限定され、取上げられている雑誌も『太陽』『中央公論』『日本及日本人』『改造』の四種類にすぎない。

今回の琴秉洞氏による試みは、民族的偏見が強化、定着させられた時期として、今世紀初頭から併合初期の一九一四年までを選び、採録雑誌の数も、『太陽』『中央公論』の総合雑誌のみならず『東洋経済新報』『朝鮮之実業』などの経済誌、『新人』『新紀元』などのキリスト教や社会主義の雑誌、さらには『少年世界』までもふくむ三〇種におよぶ。

琴氏は申すまでもなく関東大震災研究を飛躍的に高めた『関東大震災と朝鮮人』(みすず書房『現代史資料』6、一九六四年)の共編者であり、また最近の大きな成果である『関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料』(第一集〜第四集 緑蔭書房、一九八九年〜一九九六年)の編集兼解説者である。資料の博搜と綿密な分析で定評のある琴氏のこのたびの労作は、日朝関係史のみならず、日本近代史研究のための確乎たる基礎を提供するだけでなく、ひろく日本人の朝鮮認識に対し歴史的反省を求め重要ないとぐちとなること疑いない。

京都橋女子大学教授

国際認識を、どれだけ自分のものとして身につけることができるか、編者はそれを日本人に問いかけている。日本人が答える番である。ひろく活用されることを願ってやまない。

奈良女子大学名誉教授

# 日本帝国の特質や近代日本のアジア認識の本質を知るために 不可欠の資料

吉野 誠

(よしの まこと)

日露戦争から保護条約を経て韓国併合にいたる時期、各種の出版物において朝鮮に関する論説の数は飛躍的に増加した。朝鮮人の性格や文化・風俗をはじめ、産業開発や統治方式、教育政策等々、内容は多岐にわたっている。これらが一樣に、文明化に先んじた優越感から「後進」朝鮮を蔑視し、指導者意識にたつて植民地支配を賛美するものだったことはいうまでもない。ただ、植民地朝鮮に何をもちめるのか、いかなる統治を実施すべきか、経済政策をどのようにすすめるのかなど、具体的な問題ではかならずしも共通の認識があったわけではない。

『資料 雑誌にみる近代日本の朝鮮認識』全五巻の最大のメリットは、そうした多様な側面をもつた議論の全体が一望できるところにある。そこで繰りひろげられたさまざまな主張のうち、植民地支配の現実のなかで何が継承され、何が変容を余儀なくされるのか。一九二〇年代から三〇年代以降へとつづく朝鮮支配の展開過程を通観し、日本帝国の特質を全生涯にわたって把握するためにも、近代日本のアジア認識の本質を抉り出すためにも、この時期における朝鮮論議の全体を眺望することが不可欠であろう。本書の刊行がおおいに期待されるゆえんである。

東海大学教授

日常生活のこととしても、旧高官の家が「僅かに雨露を凌ぎ得る」ばかりのものだったり、教育水準が「驚くべき低い程度」だったり、軍隊の「志気の乱れ」をみたりし、または「朝鮮人としては美術は皆無」と断言されると、結局当時の読者は、筆者の言う「朝鮮人と云えば先づ野蛮人」という結論を受け入れることになるだろう。73は、日本は宗主国、朝鮮は保護国と、より明確に規定する必要性を説いたものである。74は、交戦の目的は韓国の「独立」と満洲の開放だとして、「日清韓の攻守同盟」を提唱するが、「韓は無実力であるから」として、日清の攻守同盟の主張となる。75は朝鮮での農業経営の有利を説き、75は琉球の日本化の例を引いて、朝鮮は日本の被保護国として従順なれという。77は、タイトルそのままに「満韓」における水産、植林の利を説いたものである。78は、いわば、実効ある韓国経営のためには、「先づ韓人を教育する」が先決として「吾人は日本的の教育を韓人に授く可し」と主張する。論に未分明のものを包含し、日本同化論との関連も未解であるが、善意より発する一般論としてなら、全的な否定は採らざる所であろう。

79は政治論からする満韓経営である。神鞭は、韓国併合は「世を欺瞞し正義に背」くといいつつも「韓廷我国に反対するならば……自衛権を応用して、韓国を併有せざる可らず」とあって、韓国保護論の本源を開陳している。それにしても、日本内の無頼漢を韓国などの海外に移住させよ、との論には驚かされるが考えてみるに、大日本帝国そのものが、無頼漢国家であつてみれば、驚くにはあたらないのかも知れない。

80は、新渡戸稲造が「日本帝国の膨脹」を当時の「国歌」君が代から説き起す非科学性にも驚くが、「小石が巨敵となり更に進んで大国をなす」ことの歴史的論証のあまりにも非歴史的なるにはもつと驚かされる。そして「余輩は韓国併合論と云ふが如き、野心勃勃たる説は有せ」ずとしながらも、朝鮮を「我国が之を世話するは、自然の趨勢」というに至つて、その論旨、79の神鞭と五十歩百歩の間にあるを自ら証明した。

81は、多くの韓国視察の軽薄なるを指摘するが、いわば韓国ほどの程度にうまいか、うまくないのかの論で、対象となつた韓国の痛みには、まったく無関係の論である。82は、全羅南道に限つての諸事業論だが、示唆する所少なく

32 朝鮮人には如斯して日本魂を吹込むべし

# 朝鮮人には如斯して日本魂を吹込むべし

伯爵 大隈重信

## ▲形式の巧妙世界の歴史に比なし

◎朝鮮合併の形式は如何にも巧妙なる方法によりて斷行された。獨立國と獨立國とが斯の如き方法にて合併した事實は我輩淺學にして之を知る事が出来ぬのかも知れぬが、世界の歴史上今回が嚆矢ではないかと思ふのである。

◎古來國を併する者多くは武力で征伏するにあらずんば則金力を買収したものである。合衆國がアラスカを併せたのは露國より買収したものである。ルイジアナは佛國より買収したものである。比律賓は武力と金力とで取つたものである。日韓の併合に至ては則然らず。

◎日清日露の兩戰役は孰れも朝鮮に關係せるものであるが、是れは日本が朝鮮に武力を加へたのではなくして、寧ろ日韓同盟して他に當つたのである。二十七年戰役には初め清兵牙山に屯し、朝鮮の平和に危害を加へんとせしを韓廷力足らざりし爲、日本軍代て之を擊攘したのである。降て三十七八年戰役には、我軍滿艦を仁川に沈めて京城に進むや、韓帝は迎へて之を船以給ひ、其更に北進するや韓人は我軍の爲に備役の勞を執り種々なる便宜を與へた、今日合併の由來に溯つて見ても武力を用ひ金力を使用した事は少しもないのである。

◎則我昭晝並に彼の合旨にある如く兩國主權者の合意により兩國の親密なる關係に鑑み、彼我相合して一國を作成し互に萬世の幸福を圖らんといふに在て世界の歴史に一先例を開たものといはなければならぬ。

## ▲最後に發揮せられたる王者の良心

◎前韓帝李王殿下が一箇の名譽を棄て、も臣民の幸福を増進せしめたと思召され、不徳にして永く帝位に在るよりも一切の統治を従前より倚信せる我 陛下に讓與し以て八域の生民を保障せんといはれたる御心中を拜察するに定めし堯舜禪讓の美德を慕はれたるものなるべく、平生の御治績は如何にともあれ、此最後の一段に至りて王者の良心が煥發したるものと見るべく、歴代の韓帝中拔群の光輝ある御用意と申さなければならぬ。則我 陛下よりも一視同仁の優詔を下し給ふた所以と拜察するのである。

◎故に兩者の新關係は英の緬甸、佛の安南、米の比律賓等の各殖民地に於ける關係とは全く違ふといふ事を先づ自覺しなければならぬ。

## ▲骨相學上より見たる日韓人

◎さて日韓兩國は太古より既に一體となるべき關係を有して

資	料	雑	誌	朝	鮮
		に	み	認	識
		る			
					の

韓国併合期前後

琴秉洞編・解説

全巻の構成

- 第1巻 保護条約締結以前期 (明治34・12～明治38・12)
- 第2巻 統監政治期上 (明治39・1～明治41・12)
- 第3巻 統監政治期下 (明治42・1～明治43・7)
- 第4巻 併合条約締結期 (明治43・8～明治43・12)
- 第5巻 併合初期 (明治44・1～大正3・9)

内容▼全5巻 [全30誌収録]

体裁▼A5判・上製クロス装・ケース入り

頁数▼総約2,800頁

定価▼本体98,000円＋税 (分売不可)

ISBN4-89774-241-2 C3021

関連図書

近代日本の朝鮮認識の形成を明治期のオビニオン・リーダーである新聞社説によって通史的・体系的に見ることのできる画期的な新聞集成。

資	料	新	聞	見
		社	説	る
		に		朝
				鮮

征韓論と日清戦争

北原スマ子・園部裕之・趙景達・長谷川直子・吉野誠 共編

全巻の構成

- 第1巻 横浜毎日新聞
  - 第2巻 東京日日新聞
  - 第3巻 朝野新聞・大阪毎日新聞
  - 第4巻 郵便報知新聞・読売新聞
  - 第5巻 時事新報・日本
  - 第6巻 大阪朝日新聞・東京朝日新聞・自由新聞・東雲新聞・国民新聞・万朝報・二六新報
- 別冊 朝鮮関係社説目録

内容▼全6巻 [全15紙収録] +別冊

体裁▼B5判・上製クロス装・ケース入り

頁数▼総約3,000頁

定価▼本体150,000円＋税 (分売不可)

ISBN4-89774-223-4 C3021

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03-3579-5444

特約店